



摩気神社の祭神は「おおみけつひこのかみ」といいます。「おおみけつひこのかみ」は「あまのこやねのみこと」の子で別名を「あまのおしくもねのみこと」といいます。また、横田の若宮神社の祭神を考えると、「若宮神社」と称する神社は代表的なものには三種類ある。一つは仁徳天皇すなわち「おおさ

さぎのみこと」を祀る若宮八幡宮、二つめは春日若宮神社、ここで祀られているのは「あまのおしくもねのみこと」、三つめは大神神社の若宮社、祀られている神は「おおたたねこのみこと」である。「船井郡誌」によれば、若宮神社の祭神は品陀別命としている。この品陀別命とは誉田別命と同一神で応神天皇である。横田の若宮神社の祭神を品陀別命（誉田別命）応神天皇とするのはうなづけない。一方春日の



若宮社とするのも無理である。春日の若宮社とすると摩気神社同一神になってしまうからである。八幡社の若宮とすべきである。従って、横田の若宮神社は応神天皇、すなわち、品陀別命。誉田別命の子である仁徳天皇、おおささぎのみことを祭神とすべきである。

また、摩気神社と若宮神社には祭神に関しておもしろい伝承がある。摩気神社の祭神を丹

波道主命（たんばみちぬしのみこと）とし、若宮神社の祭神を丹波道主命の妻とされる丹波之熊野之河上之麻須良比売（たんばのくまのかわかみのますらひめ）とするという説があります。横田の若宮神社から摩気神社御旅所へ御輿が昭和初期まで巡幸されていたが、神幸祭という祭礼のときに丹波道主命と丹波之熊野之河上之麻須良比売が会われるのだ。この丹波道主命は崇神天皇の時代に行われた四道將軍の派遣の一人であるといえます。「日本書記」によれば、崇神天皇が即位後、国民の大半が死亡するという疫病が国中に蔓延し、非常に心配した崇神天皇は神々を祭ってみると、疫病の流行は三輪山の太玉主命と倭大国魂神の祟りであるとわかった。そこで太玉主命を大田田根子に倭大国魂神を長尾市に祭らせ、さらに八百万神を祀り、天社（あまつやしろ）と国社（くにつやしろ）にわけ、神地（かんどころ）、神戸



(かんべ) を定めたところ、疫病はとまり、五穀も豊かに実り、国民も豊かになったという。このときに宮中に祭られていた天照大神と倭国魂神を宮中の外に祀るようにした。このとき、まだ、遠方の国々には天皇家に従わない者が多くいた。崇神天皇は北陸方面に大彦命（おおひこのみこと）を、東海方面には大彦命の子、武渟川別（たけぬなかわわけ）を、西道には吉備津彦（きびつひこ）を、山陰には丹波道主命を

派遣した。これが四道将軍の派遣である。この四道将軍の派遣、神祇の祭祀、祭政の分離、税制の創設、産業の振興、外国との通交開始など制度の創設、国政の整備など業績が多く、御肇国天皇（はつくにしらすめらみこと）とたたえられたという。崇神天皇が実在した最初の天皇とされる。崇神天皇と丹波道主命との関係は次のようになる。

孝元天皇・・・・・・・・大彦命・・・・・・・・武渟川別

孝元天皇・・・・・・・・

・開化天皇・・・・・・・・崇神天皇

開化天皇・・・・・・・・彦坐王・・・・・・・・丹波道主命

丹波道主命は崇神天皇からみれば甥にあたり、丹後国加佐郡出身の息長水依比売と彦坐王の間に生まれたのが丹波道主命である。崇神天皇の時代、出雲では反抗心が盛んで抵抗するものは多かったという。そこで派遣されたのが丹波道主命であった。丹波道主命は丹波之熊野之河上麻須良比売を娶り、日葉酢姫をもうける。後の垂仁天皇皇后である。丹波道主命は山陰・出雲地方への遠征後、丹波国多紀郡村雲の地に本拠をおいたとされる。そして、葬られたとされるのが篠山市本庄にある雲部車塚古墳で全長140mの前方後円墳であります。